

佳作

終曲の響き

福島県いわき市立泉中学校三年 吉野 まどか

最後の曲の、最後の音が響いたときの、心が震えるような背中がゾクツとするような、今までにない感動を今でも鮮明に覚えている。

私は、三年生として中学生最後の吹奏楽コンクール県大会に出場した。前日は、早めに布団に入ってもなかなか寝つけず、まちがえたらどうしようかと嫌なことをずっと考えて、結局ほとんど寝た気がしなかった。朝になってもずっと緊張していて、顔が強張っていたが、みんなで円陣を組んでから少し緊張がほぐれて、楽しみながら悔いのない演奏をしようと思えた。会場に着き、待機している間、時計の針が動くにつれ、心臓の動きが早くなっていく気がした。舞台袖で前の団体の演奏を聴いて待っているとき、周りのみんなも緊張しているのが伝わった。

ついに私たちの学校の出演になり、ぎこちなく歩

る前の独特な緊張感と静けさ、順番が近づくとつれて速くなる心臓の音、一喜一憂する周りの学校の生徒たち。そして私たちの番になった。

「泉中学校：ゴールド金賞。」

その声が聞こえた瞬間、仲間たちと飛び上がって喜んだ。東北大会に出場することは叶わなかったが、昨年の銀賞という悔しい結果を乗り越えて金賞をとることができたので、満足してコンクールを終えることができた。もうこれからあの曲を演奏することはないんだと思うとさびしくなった。それだけ、この曲には思い出がたくさんつまっていた。

終曲の最後の響きの、心が震えるようなあの感動は、これからの私の歩んでいく人生において、とても大切な思い出であり、ずっと心の中にある、一番大切な宝物である。

きながら広く大きなステージに立った。最初の音を吹いたとき、不思議と緊張感がなくなり、心から楽しんで演奏することができた。終曲が近づき、みんなの気持ちが高まってきたときに、ふと今までのことを思い出した。初めて楽器に触れたときのワクワク。先輩たちの演奏に圧倒された日々。地域の方や保護者の方のたくさんの方の拍手と笑顔。副部長として部をまとめていく難しさ。上手いかず、自分がみんなの足を引っ張っているのでは、と落ち込みたくさん泣いた日。暑い中での大変な練習。全員がびったりと揃ったときの高揚感。先生や仲間との絆を感じた瞬間。そんな楽しかったことやつらかったことのたくさん思い出が鮮やかに、一気に蘇った。

そして、ついに終曲に入り、盛り上がり最高潮に達したとき、改めて吹奏楽に出会えてよかった、この先生や仲間と出会えてよかったと、心の底から思った。演奏が終わったとき、私たち全員が眩しい照明を浴び、たくさんの方の拍手を浴びた。この達成感について、笑顔になってしまった。会場の入口には、たくさんの方の保護者の方と卒業した先輩方がいて、張りつめていた緊張の糸がほどけ、目に涙が浮かんだ。ついに結果発表の時間になった。学校名が呼ばれ